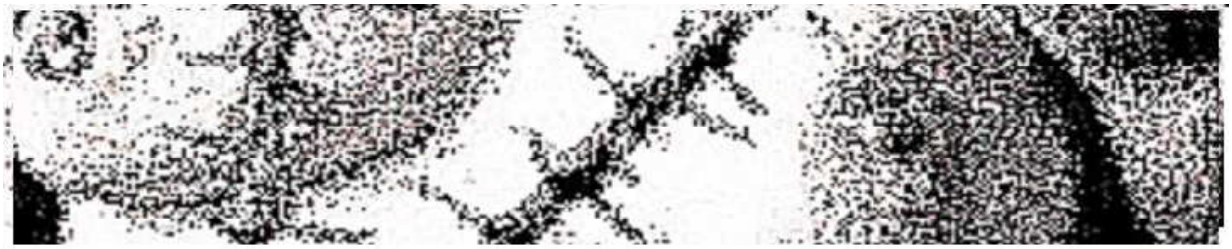


お嬢様はドM

第１部

ＳＭ小説

お嬢様はドＭ　第１部

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

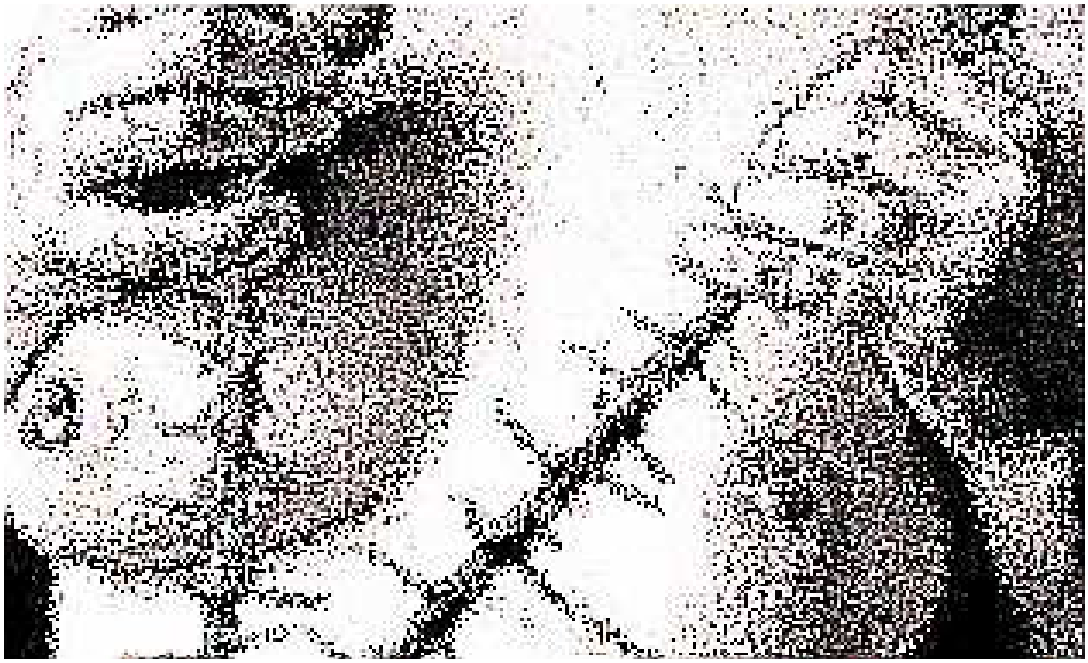
本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

騒ぐ血　７
ご命令を　２６
第三者　５７
運転手の親戚　８５
ドＭのゴキ　１０８
処女喪失　１３３
ヨガ教室　１６１
朝まで調教　１９５
トイレ掃除　２１３
赤目たち　２３２

ケツ穴　２５９
排泄　２８３
拡張　３０６
ホットヨガ　３２９
セブン・シスターズ　３７０
しつけの日曜日　３９２
マネキン　４２２
痙攣の月曜日　４５５
ケツ穴娼婦　５０１
奥付　５３６



騒ぐ血

どういうわけか、普通のオナニーだけではガマンができない体になっていました。

今年の成人式のあと、着物をとてもきつく自分で着て、それがとても感じてしまって。

それまでも、着物はお稽古などでよく着ていたのですが、なぜか、そのときは特別な気持ちになったのです。写真を撮影する間も、お父様と食事をする間も、同じ大学のお友だちとのパーティーの間も、トイレに

駆け込んで、おまんこに指を入れて、ぐちゃぐちゃにしたい、という誘惑がつきまとっていたのです。

その夜中。

わたしは腰ヒモと帯締めを手にしていました。

全裸になって、姿見の前で、腰ヒモをぎゅっとお腹のあたりに巻き付けて、きつく縛りました。食い込んで苦しいぐらいに締め付けます。

そして帯締め。その絹の淡い桜色の組み紐のものを選びました。それを腰ヒモに通し、それから股間に……。

お尻の間を通して、再び背中の方で腰ヒモに通します。グイッと引き締めると、おまんこに食い込んで声をあげてしまいそうになります。

その夜は、そのまま激しくオナニーをして過ごしました。

でも、それを境に、そのことばかりが頭から離れなくなってしまいました。

わたしの中に、もともと、そういうことを求める本能があったのかもしれません。

大学にいっても、お稽古にいっても、友達と食事を

しても、門限の七時に戻って来て、帰って来た父をちゃんとお迎えし、お茶をいただく間も、頭のことはそればかり……。

男が欲しい、ということではありません。

丸木戸財閥の一人娘として育てられたわたしにとっては、男は父のような存在であり、別格で、いつか父がわたしの夫となる人を見つけ、結婚し、跡取りを産むのです。

それは、既定の路線で、もちろん夕食後、毎日のことを父にお話しするときに、「恵梨香はなにも心配しな

くていいんだよ。自分のことだけを考えなさい」とか、「好きなように生きてほしいんだ」と父に言われるのですが、それでも、父が既定路線を望んでいることは自明のことでした。

つまり男女のことについて、過度の期待はしていませんでした。

夫になる人に処女を捧げる、などと大げさなことは思っていませんでしたが、事実上、そうなるのだろうと思っていました。

お嬢様。

そう呼ばれて育ったわたしは、外では常に人に命令し、わがままを言い、気が済むようにしてもらうのが当然、といった態度をしてきました。

そのせいか、まともなボーイフレンドもいません。いたとしても、父の差し金で仕方なく付き合ってくれているお金持ちの子だけです。

贅沢だと言われるでしょうが、幼いときに母を亡くしていたこともあって、わたしは孤独の中で育ちながら、お嬢様の演技をしてきたのだと思います。

でも……。

ぐいっと痛いほどに食い込む帯締めを味わってしまうと、自分の中に別の自分がいることをはっきり知ったのです。

それから、深夜のオナニーは徐々に変化していきました。

二日、三日は、ヒモを股間に感じるだけで十分に楽しめたのですが、しだいに物足りなくなってきました。だからといって、なにかをあそこに入れるほどの勇気はありません。

裸に股縄の姿で、鏡を見ながら、あれこれ妄想しま

す。

そして別の帯締めを使って乳房を縛るようになりました。根本をぐいっとちぎれそうになるほど強く縛ります。醜くふくれあがる乳房。しばらくすると鬱血してきます。

なんて、ステキな苦痛なのでしょう。

指で乳首を揉みしだき、平手で叩いたりもしました。

四日目の夜、外は嵐でした。

大粒の雨が降っています。十月の冷たい雨です。

窓をあけて、バルコニーに出ました。全裸で股縄、

そして乳房を縛りあげて。
それほど寒くは感じません。雨に打たれて、びしょ濡れになると、それがとてもステキなのだとわかり、バルコニーに横たわって、オナニーをしました。
オナニーといっても、乳首をつまみ、あそこを手の平で撫で回すようなものです。ただ、ヒモが食い込むので、より強い快感が得られるのです。
幼い頃に、バルコニーの横の雨樋を伝って上り下りしたことがあるのを思い出しました。
小さいな子どもではないわたしの体重を支えられる

かどうか、そんなことを冷静に考えてはいませんでした。

思いついたら、がまんできなくなっていました。

頭の中がカッとなって、もう夢中で雨樋を伝って庭に降りていました。

芝の上を素足で歩くのは心地がいいのです。

そして、ガレージの裏に行きました。そこはガレージの斜めになった屋根から雨水が樋をあふれて、滝のように降り注ぎ、芝はなく泥が顔を出していて、大きな水たまりになっていたのです。

そこに頭から突っ込んで、泥の中でもだえながら、オナニーをしました。
いけないことをする悦び。
汚いものに体を浸す悦び。
見つかったらなにを言われるかわからない状況に、自ら飛び込んで行く悦び。
そして解放感……。
どのぐらい、そうしていたでしょう。
何度も絶頂を味わって、ふと気づくと、ガレージの横に大きな傘を差した人影がありました。

お父様？

わたしは凍り付きました。もしそれが父なら、もう一生はメチャクチャです。父が期待した通りのお嬢様を演じてきたこれまでが、すべてムダになります。

お茶、お花、書道、日舞、料理、乗馬、テニス……。あらゆるお稽古ごとも無意味です。単なるバカな娘だったのか、と父はガッカリし、わたしを追放してしまうでしょう。丸木戸家の恥、ということです。

「たっぷり楽しんだんですね」

聞き慣れない声でした。

父ではない。もっと若い男です。
「だれなの？」
自分の格好を忘れ、いつものように強気の言葉を発していました。
「安心してください。牧野昭彦です」
牧野家は、昔から執事としてこのガレージの向こうの家に住んでいます。そこにはわたしの一つ下の男の子がいました。ですが、幼い頃から、近いようで遠い存在で、まったく別々に育てられていました。
外で顔を合わせても気づかないでしょう。いまのい

ままで、その存在さえ忘れていましたから。
わたしは泥の中から立ち上がりました。威厳もなにもありません。
「見ていたんですか」
「いいんですよ。なにも言わないでください。だれにも言いませんから」
雨の中で、あたりに明かりはなく、彼がどのような表情かもわかりません。
「それよりも、どうやって部屋に戻るんですか？」
「なんですって？」

「あなたは、バルコニーの横の雨樋を伝って降りてきました。でも、あそこを登るのはムリです」

まったく考えていないことでした。

「ちょっとお待ちください」

彼はわたしに傘を預けました。そしてガレージの裏口から中に入っていきました。

やがて、折りたたみ式のアルミのハシゴを持ってきました。

そういうものがそこにあることさえ、知りませんでした。

「びしょ濡れのあなたが傘をさしているんですね」
彼は楽しそうにそう言うのです。
生まれてはじめて、男の人のために、傘を差し出しました。
自分はもう濡れて泥だらけなのですから。
「ありがとう」
彼はさっさと庭を横切ります。わたしは慌てて、ついていきました。彼に傘を差しかけながら。
ハシゴを組み立て、ストッパーをカチッと音を立ててセットし、それをバルコニーに立てかけました。

「いいですか。一つだけ、約束してください」
「なんでしょう」
「これからは、一人だけで危ないことをしないでください」
「気をつけます」
「手が足りないなら、ぼくに言ってください」
「あら。呼べば来ていただけるの？」
「ぼくの携帯に電話してください」
「存じませんので」
屋敷の常夜灯にぼんやりと照らされる昭彦は、なか

なかハンサムで背の高い男性でした。
「わかりました」
彼はポケットからペンを取り出し、わたしの手をつかむと、そこに携帯電話の番号を書きました。尖ったペン先が皮膚に突き刺さるようで、全身に電流が走りました。
「さ、早く」
ハシゴを伝ってバルコニーに戻りました。
彼が傘を肩にのせて、ハシゴを畳み、ガレージの方へ行くのが見えましたが、その先は闇で、よくわかり

ません。
そのうち、物音もしなくなり、雨はさらに激しくなってきました。
自然に手が股間に伸びていました。
昭彦様。
わたしのご主人様。
昭彦様のご命令には、どんなことでも、恵梨香はいたします……。
つぶやきながら、アクメに浸るのでした。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一二年四月刊行　第一版　二〇一三年八月　第二版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●荒縄工房　淫美

●エロな気持ちの日々

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。